

## はじめての歎異抄講座

### 1.本章の内容

信仰の生活をしていくなかで、唯円はふたつの疑問が解決できずにいました。「念仏を疑うわけではないものの、念仏したからといって幸せを実感できない違和感」、そして「阿弥陀如来の西方浄土へ行くことを疑うわけではないものの、浄土へ早く行きたいと思えない劣等感」。第9章では二つの問いを師に率直に投げかけ、それに対して親鸞聖人からいただいた言葉が、唯円にとっては生涯忘れがたいものとなりました。また、「親鸞」「唯円房」とお二人の名前が出てくる唯一の箇所でもあります。

### 2.「わたしも同じです」の温かいまなざし

踊躍ゆやくかんぎ歡喜とは經典に出てくる言葉で、〈踊躍〉は喜びが全身の動作に表れた姿、〈歡喜〉が心身に満たされる喜びを指します。「たとひわれぶつ仏を得たらんに、他方国土の諸菩薩衆、わが名字を聞きて、**歡喜踊躍**して菩薩の行を修し徳本とくほんを具足せん」(『無量寿經』第44願)。信心を得た菩薩は歡喜し、踊躍し、それが永遠に続くとして經典に示されるものの、一時感じた信仰の喜びが永続しない、新鮮さが薄れ信仰の倦怠期にある自分自身に、唯円は悩みを深めていました。また、念仏によって西方浄土への往生は確かと信じているものの、急いで往生したいと思わないのは本物の信仰と言えないのではないかという劣等感にも苦しんでいました。

この二つの不安に対し、親鸞聖人は「わたしも同じです」と、唯円とまったく同じ視点で見えています。相手を包み込むような温かなお人柄が偲べれます。親鸞聖人も唯円も、信の一念によって生じる歡喜踊躍の心を経験なさった人です。信の一念とは阿弥陀如来の智慧の光に包まれる信体験のことで、永遠のなかの一瞬の出来事です。その一瞬が人知のなかでは永続しません。人間が幸せを味わうのは一瞬にすぎず、時間と共に忘れてしまう。時間が経てばよろこべなくなる、あるいは最初からよろこぶことができないのは信心が足りないからではなく、煩惱をもった人間には歡喜踊躍の感動が永続することなど始めから不可能だと阿弥陀如来にはわかっていたからこそ、人間の手を離れたところで阿弥陀如来は願ねがい(他力)を完成させる以外にすくいの方法がなかったのです。「よくよく案じてみれば」、人間は願ねがうと願ねがわざるとにかかわらず浄土に包み込まれるよう生きています。それを親鸞聖人は自然法爾じねんほうにという言葉で表されました。

### 3. 煩惱の所為が往生していく証拠とは

久遠劫という時間のはるか昔から、私たちは流転輪廻を繰り返してきました。「**自身は現にこれ**  
ざいあくしやうじ こうごう もつ しゅつり  
**罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに没しつねに流転して、出離の縁あることなしと信ず**」  
 (善導大師『観經四帖疏』)と言われるように、せいぜい数十年前に生を受けたのは現在の姿形をしたわたしに過ぎず、本質的な意味のわたしという存在はこれまで数えきれないほどの流転を繰り返し、今に至っています。急いでまでお浄土へ行きたくないのは、久遠劫という時間にわたって本質的なわたしが住み慣れてきた娑婆への執着がいかに強いかということです。執着とは煩惱です。煩惱ゆえによるこぶべきところをよろこばず、ちょっとでも死にそうになれば不安を感じる。

しかし、煩惱があるゆえにわたしの浄土往生は間違いないと、なぜそこまで言えるのでしょうか。煩惱は智慧の光に浮き彫りに照らし出されています。それは事実です。その智慧の光の根源は、「仏かねてしろしめして」とある、煩惱具足の凡夫をすくうために法蔵菩薩がありとあらゆる状況と方策を検討して、阿弥陀如来となって誓願を成就されたところが根源なのです。

一体、わたしたちが往生する証拠はどこかといえば、その証拠は移ろいやすいわたしたちの心の中にではなく、南無阿弥陀仏のお姿そのものにあります。法蔵菩薩がすでに成仏していらっしゃる、誓願がすでに成就しているということが、わたしたちの往生の何よりも頼もしい証拠なのです。

第9章の味わいは「他力の悲願はかくのごとし、われらがためなりけり」、この一文から始まり、この一文に極まっているといえます。他力といい、悲願といい、誓願ともいわれるはたらきはわたしを目当てに、わたしの煩惱を目当てにはたらいているということ、そして煩惱が真っ盛りということは他力の悲願がはたらく真っ盛りであると同義であります。その他力のはたらきの真ん中に、煩惱の真ん中にわたしがいる、それが親鸞聖人の味わわれた「よくよく案じみれば」の世界観だったのだと思うのです。

以 上